

タイトル	開催の挨拶(<特集II>産官学連携シンポジウム 産官学連携における社会科学系モデルの探求,山田定市教授退職記念号)
著者	内田, 昌利
引用	北海学園大学経営論集, 2(4): 195-196
発行日	2005-03-25

開催の挨拶

北海学園大学経営学部 部長 内田昌利

司会—— それではこれより、北海学園大学経営学部主催、北海道銀行様、株式会社ニトリ様、北海道経済産業局様、北海道中小企業総合支援センター様御後援による、シンポジウム「産官学連携における社会科学系モデルの探求」を始めさせていただきます。

今年度、北海学園大学経営学部では、4回のセミナーと、本日のシンポジウムをあわせて5回の産官学連携活動を実施しております。特に今年度は、北海道銀行様、株式会社ニトリ様、北海道経済産業局様、それから北海道中小企業総合支援センター様の御協力をいただきまして進めております。

—— 本日お配りをさせていただきました資料の中に、現在北海道中小企業総合支援センター様の方で推進されております、創業準備オフィスの御案内及びそれから現在の中小企業に関する支援状況等のパンフレットを配付させていただいております。この創業準備オフィスは、学生の皆様、または一般の社会人の皆様も活用できるシステムになっております。見ていただいて、御興味のある方は北海道中小企業総合支援センターの窓口までお問い合わせをいただければと思います。

—— では、早速講演に入る前に、私ども北海学園大学経営学部の学部長でございます内田昌利よりごあいさつを申し上げます。

内田学部長—— 内田でございます。私どもは、今から7年ほど前の平成9年の秋に、一つの大変大きな志を立てました。えてして象牙の

塔と言われるような、内にこもりがちな大学から、外に、社会に開かれた大学に変わっていかないといけない、そういう強い意識に支えられて、そしてそれまでおられました先生方の、言うなればフラストレーションをバネにして、新しい経営学部をつくろう。現代の社会経済から真に求められている人材をつくる、育成する。最初は細々とした流れでしたけれども、そういう新しい経営学部をつくろうという決意がなされたわけでありました。それが平成9年の秋でした。

—— フロム・インサイドからフロム・アウトサイド、外から大学を見る。その視点を忘れず、その視点に立った学部づくりをしていこうという声にこたえるべく、今こちらに列席いただいております熊本学長の確固たる御支援を受けて、平成12年には、社会人を主な対象とした経営学研究科修士課程を設立し、そして続く平成14年には、同博士課程を設置しました。そうした勢いが、次に新しい経営学部をつくろうという大きな流れになっていったのでございます。そして平成15年春に、現在の経営に不可欠な基礎知識と、そしてスキルとを有した社会的価値の高い人材を育成する、この新しい経営学部が誕生したのです。それから、今2年がたとうとしているわけです。ですから、経営学部は特色ある教育や研究を行うことはもちろん、社会とのつながりを重視した施策を幾つも展開してきております。その柱になるのが、産官学の連携

推進活動でございます。

—— 来年には、独自の寄附講座を開設し、また独自の企業研修制度も実施してまいります。そして、本日、本年度の総まとめとするセミナー・シンポジウムの活動でございます。

既に経済界、産業界を代表する講師陣によるセミナーが、4回開催されております。そして、今回はそれを総括する産官学連携における社会科学系モデルの探究と題して、基調講演を明治学院大学経済学部教授清水聰先生、そして堰八義博北海道銀行代表取締役頭取の御両名にお願いをいたしました。基調講演後は、堰八頭取、清水先生に加えて、浦忠幸北海道経済産業局産業部長、中島麻人ジャフコ北海道支社長、そして本学の黒田重雄経営学部教授にパネリストとして加わっていただきまして、パネルディスカッションを展開していく予定でございます。

常に社会からの視点で教育と研究を、そして社会貢献を積極的に進めていこうとする経営学部理念と志を感じ取っていただければ幸いです。

—— 最後に、誤解を恐れずに言えば、世の中の価値を生み出すのは、官ではなくて民の活力であります。民が主役で、官は脇役であり

ます。そして、民の活力のものは、自立・自助を根本精神とすることです。

経営学部は、本学の理念である不撓不屈の精神、忍耐力、独立心を有し、常に前向きにチャレンジしていく能力を持った人材を育成し、社会に送り出し、そのことによって、経営学部の存在意義を実証してまいりたいと思っております。今後とも皆様の御理解と御協力をお願いする次第であります。

以上をもちまして、経営学部長のごあいさつといたします。ありがとうございました。
司会—— 御講演に入ります前に、本日のタイム・テーブルでございます。お配りしてあります資料のとおり基調講演の後、20分程度休憩をさせていただきまして、その後パネルディスカッションという形で進めたいと思います。

また、事前にお配りいたしましたパンフレットでございますが、実を言いますと誤植がございました。お詫びを配らせていただいております。このような形で誤植がございましたことをお詫び申し上げるとともに、訂正をさせていただきたいと思っております。それでは、早速御講演の方に移りたいと思っております。